

氏名	ひさ たけ てつ や 久 武 哲 也
学位(専攻分野)	博 士 (文 学)
学位記番号	論 文 博 第 408 号
学位授与の日付	平 成 13 年 3 月 23 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 4 条 第 2 項 該 当
学位論文題目	文 化 地 理 学 の 系 譜

論文調査委員 (主査) 教授 金田章裕 教授 石原 潤 教授 石川義孝

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は18世紀末の啓蒙主義の時代から20世紀末までの文化地理学の系譜をたどった地理学史研究である。こうした学史的な研究では、いつの時代にも、そしてどの学問分野でもそうであるように、世界をみる見方やその枠組が大きく変化していく際に起るある種の混乱や葛藤を背景にしている場合が多いし、学問的にもその境界が流動化し、またその基礎づけにゆらぎが生じるという状況下で、自らのたずさわる学問の来し方を顧るという反省的思考に支えられている場合が多い。

文化地理学も、1970年代以降における地理学の多様化の中で大きく変ってきたし、その研究方法も、また社会的文脈も変化している。とくに1980年代の後半期からの地理学における「文化論的転回」(cultural turn)を契機に、より批判的な視点から「新しい文化地理学」を構築しようとする試みが行われるようになったし、さらにまた地理学における文化概念の取り扱い方をめぐって多くの議論が起ってきている。本論文も、こうした地理学における大きな振幅をきっかけに、いくつかの問題を考えてきた結果できあがったものである。

本論文でとった研究の基本的立場は、1980年代初期から地理学史研究あるいは地理思想史研究の中で展開されるようになった「文脈論的手法」(contextual approach)に基づいて、文化地理学の成立契機や展開過程を分析することにある。ここでは、文化地理学がそれぞれの時代において、あるいは各々の国や地域において、その置かれた特定の社会的文脈の中で担った役割や批判的な視点といったものを掘り起していくことが主要な課題となってくる。すなわち、19世紀の中葉において文化地理学が持っていた「神学批判」としての側面、あるいは20世紀初期のアメリカにおいて文化地理学が果たした「地理学批判」としての役割、さらに第2次世界大戦後の時期に顕在化した植民地主義と先住民の問題や地球環境の生態的破壊の問題に対して文化地理学が提示した批判的視点などの側面に焦点をあてていくということである。

そういった意味で、本論文では全体として文化地理学が同時代の中で抱え込んだ意見の対立点、あるいは批判を通して顕在化した葛藤というレベルをできる限り明確にすることに務めた。それゆえに、こうした作業には、ある特定の社会的・政治的状況下で与えられ、あるいは創り出された選択の幅や条件の持つ意義を可能であった多様な選択肢(オルタナティブ)と対照しながら位置づけるという過程を含むことになる。

さらに本論文がとったいまひとつの方法的特徴は、従来からの地理学史研究がとってきた方法に地理思想史的分析方法を加味したことである。すなわち、ある特定の地理的概念や学説の変遷を検討するといった伝統的な地理学史的分析方法に、そうした概念や学説を提示した地理学者の個人としての思想形成や学派の形成を通してのある学説や概念の普及と認知といった側面とを接合することによって、地理学の概念や学説の持つ背景をより見えやすくするという利点があるからである。本論文の各章に、近代における文化地理学の確立に大きな影響力をもったサウアー(Carl. O. Sauer, 1889-1975)の所論が引かれているのはそのためである。

本論文は第Ⅰ部「文化地理学の成立過程と課題・方法の形成」、第Ⅱ部「サウアーとアメリカ文化地理学」、第Ⅲ部「文化地理学と文化景観論」、第Ⅳ部「日本における文化地理学の展開」という4部構成をとり、全8章からなる。

第Ⅰ部では、18世紀末の段階で「文化」概念が啓蒙時代の「文明」概念と対立する意味を獲得していく過程を分析し、そ

の延長として、文化地理学が新しい研究領域としてどのように成立し、独自の課題と方法が形成されていったかという点を論じている。

第1章では文化概念が新しい意味と役割を持つ契機をヘルダー (Johann G. Herder, 1744-1803) に求め、彼の歴史哲学的な考察を通して文化概念がローカルで土着的なもののもつ価値や意味を重要視するようになり、現代における「地域主義」の発想の基盤を与えていったこと、さらに彼は従来の神学的な地球観に対して「人類のすまいとしての地球」という立場を強調することによって、人間の自然への介入という新しい次元の問題を提起することになった点が検討されている。とくに彼のいう「自然への文化の介入」という観点は、一方では自然的存在としての生物(動物・植物)への人間の介入(家畜化や栽培化などのドメスティケーション)の問題を明確化し、他方では自然的存在としての人間(先住民)への文明(植民者)の介入という問題もその延長で提起し、後の文化地理学の発展の基礎づけを与えていった。

さらにまた「人間のすまい」(habitat)というヘルダーの考え方は、地球における民族や生態環境の持つ多様性を綿密に記述する方向に向わせ、後に彼の「風土」という考え方に結晶していくが、それは人間の生活にとっての意味と価値という側面から地球の生態を記述するコロロギー (Cherologie) の重要な基盤となって近代地理学の中に持ち込まれてくる。すなわち、近代地理学にとっての「文化」概念の意義は、ヘルダーを介して、自然への文化の介入(ドメスティケーションと先住民の問題)、普遍的なものに対するローカルなもののもつ価値、さらに地球のさまざまな現象の人間の生活にとっての意味の記述という側面を強調する方向を明確化したということができよう。

第1章の後半部は、文化地理学が成立期にもっていた社会的文脈と地理学内部における対立点との関係を論じている。ヘルダーからリッター (Carl Ritter, 1779-1859) に至る移行期における文化概念は、文明概念との差異を明確にしなが、より物質的なものとの結びつきを深めていく。それは当時、博物館や美術館、動物園や植物園、さらに水族館などの施設が増加し、いわば「好奇心の視覚化」と結びつきながら学門の分業が起り、またそれと並行するように学問の対象規定が行われるようになっていった社会的文脈と対応している。1845年にカップ (Emst Kapp, 1808-1896) が創始した「文化地理学」(Culturgeographie) はそういった状況下で生み出されたものである。カップの文化地理学の規定が「人間の労働を通してこの地表に刻まれた人間の精神の痕跡」を対象とするという、物質的かつ視覚的な側面を強調するのはそのためである。

こうしたカップの文化地理学の規定は、ラッツェル (Friedrich Ratzel, 1844-1904) によって利用されながら反転されていく。すなわち、ラッツェルの『人類地理学』によって、「人間の生活を拘束する自然」という環境論的な視点が重視されるようになる。しかしシュリッター (Otto Schlüter, 1872-1959) は、このラッツェルの立場を批判しながら、再度カップの文化地理学の考え方の有効性を意義づけ、しかも文化の可視的側面をより強調しながら、自らの中に導入し「文化景観論」を構築していく。第1章の後半部は、こうした文化地理学と人類地理学、そして文化景観論の相互のつながりに力点をおいて議論されている。

第2章では、このような文化地理学の対象規定の上に乗って、文化地理学の方法論と課題がどのような過程を経て形成されていったのかという側面について分析されている。とくに、カップからシュリッターへと受け継がれた「文化段階」説という考え方の難点が克服され、他方ではラッツェルによって提唱された「地理的方法」としての伝播論がアメリカの人類学における先住民調査を通してその有効性が検証され、「文化領域」説が主張されていくが、こうした批判に新しい伝播論を形づくる上で大きな影響を与えた点が議論される。そして後半部においては、この「文化領域」説とシュリッターの「文化景観論」がサウアーを通して接合され、それを基礎としてアメリカにおける文化地理学が展開すると同時に、独自の文化地理学的課題が設定されていった過程が論じられている。

第II部「サウアーとアメリカ文化地理学」は、サウアーの地理学的構想の延長に発展したアメリカの文化地理学がどのような性格と特質を持つものであるかといった点について、サウアー自身の地理思想の形成過程と関連づけながら論じたものである。

第3章「カール・サウアーの地理思想と文化地理学」においては、その前半部で、サウアーの地理思想の形成過程を1880年代から1920年代に至るアメリカにおける反近代的心性との係わりの中で検討するいっぽう、ドイツ地理学、とくにシュリッターの「文化景観論」がアメリカの人類学で展開されていた「文化」概念と出会う過程で生じた「ねじれ」とその影響について検討し、そして後半部では、サウアーの構想する文化地理学が、アメリカ地理学のもつ「環境決定論的思考」を鋭

く批判していく「地理学批判」の側面を強調し、そしてサウアーのこうした批判的姿勢は門下生にひとつの共通した研究のスタイルとして受け継がれて、バークレー学派と呼ばれる独自の特質をもった研究者集団が形成されていったこと、そしてこのバークレー学派は、その後の文化地理学の発展にとって大きな役割を担ったことが論じられる。

第4章「バークレー学派とアメリカ地理学」では、アメリカにおける文化地理学の方法論の形成に最も大きな影響力をもったサウアーの「景観の形態学」の論文が、当時のアメリカ地理学の新しい展開の中で果たした役割と、さらにその解釈が、アメリカにおける地域主義の興隆と地域研究の制度化の過程でねじれていく側面を検討している。それは大きな枠組の中でいえば、1910年代から1930年代にかけてのアメリカ地理学の確立期に、サウアーやバークレー学派の文化地理学が持っていた批判的視点がどのように受けとめられたかという点を明らかにしようとしたものである。そしてまた、それはひとつの思想や考え方が異なった文脈の中でどのように解釈され、変容し、そして受容されていったのかという地理思想の伝播と変容という側面を記述しようとする試みでもある。

第5章「アメリカ文化地理学の成立と展開」は、サウアーやバークレー学派の主張する文化地理学が、研究のみならず教育のカリキュラムとしてどのようなプロセスで制度化され、アメリカの地理学の中で独自の位置を占めていったのか、さらにアメリカ地理学の中だけでなく、世界的にもバークレー学派の文化地理学が認知されていくためには、どのような条件が必要であったのかといった側面が分析されている。いわば、文化地理学の教育における制度化に力点をおいて議論される。

第Ⅲ部「文化地理学と文化景観論」は、第6章のひとつの章から構成されているが、サウアーやバークレー学派の文化地理学が19世紀末以降議論されてきた「景観」概念に対して、その記述や表現の方法といった問題も含めて、どのような文化の解釈を持ち込んでいったのかという点を議論している。景観の解釈という問題に対して、「地図的変換」と「記号化」という概念を用いて整理しているのは、景観の「観察」と「表現」の問題を同時に考えようとしたためである。そういう意味では、第Ⅲ部は第Ⅱ部の分析や記述を支えている概念のうち、「景観」を中心として見た文化地理学の問題のひろがりを検討しようとしたものであるといえよう。

第Ⅳ部「日本における文化地理学の展開」は、第7章の「戦前編」と第8章の「戦後編」からなる。日本における「文化」概念の形成過程あるいは翻案過程と地理学自体の制度化の過程とは必ずしも一致しない。しかし、文化地理学の実質的な研究の方向づけは、「観察項目」の確定、いわば何を見るかという対象の規定とともに始まっている。第7章においてとくに焦点をあてたのは「郷土会」を中心とした野外調査の実施であり、「観察項目」の確定のプロセスである。さらにそうした過程であらわされてくる地理的なものの性格づけと、さらに隣接学問分野との相互の交渉の過程である。それゆえ、そこでは、「文化地理学」という用語や概念にとらわれず、1920年代中期以降、欧米の方法論が導入され、そして同時に日本における野外調査を通して個別の問題を検証しながら内実化されていった実質的な文化地理学研究を含めて議論されている。

第8章の「戦後編」では、第2次世界大戦後における社会的混乱と占領体制下における「民主化と近代化」という政治的文脈の中で「文化」概念が果たした役割と意味が、まず検討される。そして1950年代の中期からの社会的混乱からの立ち直りと新しい「国民文化」の構築とアイデンティティの形成という社会的文脈の中で文化地理学が果たした課題がどのようなものであり、それが日本国内における地域調査や外国での調査プロジェクト、さらに日本文化の起源論とどのように結びついていったのかといった点が論じられる。さらに1960年代から1970年代にかけて、海外調査の成果と日本国内における調査の成果を比較・対照する中から、「文化」概念はより現実的なレベルでの検証を経て普及し、それに伴って文化地理学が興隆してくる。その過程で起ってくる文化地理学における日本的課題や新しい行動主義的方法との結びつきも議論される。第8章の後半部では、1980年代以降における「文化」概念の批判的検討を含めた文化地理学の新しい研究の流れが批判的に整理されている。

論文審査の結果の要旨

本論は、文化地理学の成立契機やその展開過程について、「文脈論的手法」に基づいた分析を展開したものである。文化地理学そのものについて、論者は、「地上において、人間の労働を通して可視化された人間の精神」を取り扱うものとする、E. カップ(1808—1896)の規定を重視する立場に立つ。文化地理学が同時代の中で抱え込んだ意見の対立点あるいは葛藤

について、地理的概念や学説の変遷を検討する、従来からの地理学史的研究の方法に加えて、地理学者の個人としての思想形式や学派の形成を通してその背景を重視する、地理思想史的分析方法を採用しているのが特徴である。本論では特に、近代における文化地理学の確立に大きな影響力をもったC. O. サウアー（1889—1975）に焦点が据えられ、随所でその所論が引かれている。

本論は、目的や構成について述べた序章のほか、第Ⅰ部「文化地理学の成立過程と課題・方法の形成」、第Ⅱ部「サウアーとアメリカ文化地理学」、第Ⅲ部「文化地理学と文化景観論」、第Ⅳ部「日本における文化地理学の展開」の4部に編成された計8章からなり、全体としてA5版648頁の大冊である。

第Ⅰ部では、第1章で文化概念が文明概念と対立する意味を獲得し、文化地理学が新しい研究領域として成立していく過程を検討している。その最初の契機をJ. G. ヘルダー（1744—1803）に求め、「人間のすまいとしての地球」という観点から「風土」という考え方に結晶していく思考力が、自然への文化の介入、普遍的なものに対するローカルなもののもつ価値、地球のさまざまな現象が有する人間の生活にとっての意味の記述という、近代地理学が強調する諸方向を明確化したとする。これが、現代における「地域主義」の発想や、地球の生態を記述するコロロギーの重要な基盤となったことをも指摘している。

ヘルダーからC. リッター（1779—1859）に至る移行期の文化概念について、文明概念との差異を明確化しつつ、より物質的なものとの結び付きを深めていく過程を抽出し、上記のカップが創始した文化地理学の規定が生み出された状況を説明する。さらに、カップの規定は、F. ラッツェル（1844—1904）によって、「人間の生活を拘束する自然」という環境論的な視点へと反転利用されたが、O. シュリューター（1872—1959）が、ラッツェルを批判しつつ、文化の可視的側面を強調した「文化景観」論を構築していく状況を論じている。

第2章では、ラッツェルによって提唱された「地理的方法」としての伝播論が、アメリカの人類学において「文化領域」説へと展開し、さらに、サウアーを通して、この「文化領域」説とシュリューターの「文化景観」論が接合され、それを基礎としてアメリカにおける文化地理学が展開し、文化地理学的課題が設定されていった過程を論じる。

第Ⅱ部ではまず、サウアーの地理思想の形成過程を、1880年代から1920年代の反近代的心性との係わりの中、およびドイツ地理学がアメリカ人類学で展開されていた文化概念と出会う過程で生じる「ねじれ」との関連で検討する。その上で、サウアーの構想する文化地理学が、アメリカ地理学の有した「環境決定論的思考」に対する「地理学批判」としての側面を強調する（第3章）。

続く第4章では、サウアーの「景観の形態学」の論文（1925）が、当時のアメリカにおいていかに解釈され、変容し、受容されていったのかという地理思想の伝播と変容を取扱っている。さらに、サウアーやパークレー学派が主張する文化地理学が、研究のみならず教育のカリキュラムとして制度化される過程を検討している（第5章）。

第Ⅲ部（第6章）では、サウアーやパークレー学派の文化地理学が、19世紀以降議論の進められてきた「景観」概念に対し、どのような文化の解釈を持ち込んでいったのか、を論じる。デューラーの「風景画」の構図や「景観像」の問題について、「地図的変換」と「記号化」という概念を用いて整理をし、景観の「観察」と「表現」の問題を同時に検討している。

第Ⅳ部では、まず日本の戦前における「文化」概念の形成過程ないし翻案過程をたどり、地理学自体の制度化の過程との齟齬を指摘する（第7章）。その中で、文化地理学の実質的な研究の方向付けは「観察項目」の確定と共に始まったとし、新渡戸稲造が主催した「郷土会」を中心とした野外調査に注目する。「観察項目」の確定の過程において、地理的なものの性格付けが進み、また、隣接学問分野との相互の交渉が行なわれ、「文化地理学」という用語や概念にとらわれず、個別の問題を検証しながら内実化されていったことを論じている。さらに、戦前・戦中に展開した「外地研究」の位置付けをも試みている。

第8章では、第2次世界大戦直後の社会的混乱と占領体制下における「民主化と近代化」という政治的文脈から検討を始める。その中で「文化」概念が担った役割と意味が検討される。さらに、1950年代中ごろからの社会的混乱からの立ち直りと、新しい「国民文化」の形成という社会的文脈の中における文化地理学の整備の過程が論じられる。日本国内における地域調査と海外調査の結び付きや、日本文化起源論の展開との関わりなどが検討され、1960年代から1970年代にかけての国内・国外の調査成果を比較検討し、その過程で発生した文化地理学の日本的課題が論じられる。1980年代以後の新しい文化地

理学の動向についても、行動主義的方法やコスモロジー、エスニシティー、文化の表現、といった視点をめぐる議論が加えられている。

以上のような本論の特徴は、何よりもまず、「文化地理学」という観点による、地理学史全体へのアプローチの姿勢にある。しかも、論者が設定した方法は、単なる地理学史研究にとどまらず、地理思想史的分析法を導入し、それぞれの時代において、またそれぞれの国や地域における、特定の社会的文脈の中に位置付けて検討を加える「文脈論的手法」が採用されている点が、重厚な議論の基盤となっている。

もとより、このような研究法・視角そのものは特に目新しいものではない。また、1980年代からの地理学における、いわゆる「文化論的転回」の中で、文化概念の取扱いをめぐる議論や、新しい文化地理学の構築をめざす議論が重ねられている。本論もまた、この潮流の中における思考の産物とみることができるが、論者の視野の広さが本論の骨太の議論を支え、複雑な渦巻の中に幾筋かの有機的関連と連続的な流れを見出すことに成功している。

本論が、18世紀ドイツから20世紀のアメリカ・日本までを視野に含めながら、有機的な議論を展開し得ているのは、サウアーという文化地理学の巨人の存在とも関わる。しかし、本論については、サウアーの思想とその背景、その伝播・変容・受容の過程に広く思索をめぐらし、それらと密着した議論を構成し得た論者の、視角の適確さと分析能力の高さを評価すべきであろう。「文化地理学の系譜」という本論の課題を十全に展開するためには、ドイツ以外のヨーロッパ諸国や、アメリカ・日本以外の多くの国々における展開の状況にも、検討の手をのばす必要があるかも知れない。また、サウアーが初期に引用したS.パッサルゲ(1866—1958)の「景観」概念と、より多くの類似性が指摘されているシュリューターのそれとの相違や、それに付随する問題などにも、各章の元となる論文の初出時期の前後にも関係するのであろうが、やや明確さを欠く部分がみられる。このほか、第Ⅰ～Ⅲ部が文化地理学の巨人を中心とした論述であるのに対し、第Ⅳ部の日本の部分が、全く異なった手法に拠っているのも、もう一步の肉付けが望まれるところではある。しかしこれらは、論者の精力的な分析が続くことによって、いずれ解消するであろうし、本論の議論の価値を損ねるものではない。

以上審査したところにより、本論文は博士(文学)の学位論文として価値あるものと認められる。なお、平成13年1月18日、調査委員3名が本論文とそれに関連した事柄について口頭試問を行った結果、合格と認めた。